

〔論文〕

Saussure の「語る主体」と時枝誠記の「主体観」

松中 完二*¹An Analysis of the Similarities between Saussure's and Tokieda's Linguistic Thought
— On Saussure's "*sujets parlants*" and Tokieda's "*subjectivity*" —

Kanji MATSUNAKA

Abstract

The Swiss linguist Ferdinand de Saussure, who laid the groundwork for modern structural linguistics at the turn of the century, is known as the father of modern linguistics in the 20th century. Saussure's theory was first translated into a foreign language in 1928 by Hideo Kobayashi.

It was Motoki Tokieda, however, who expressed a strong objection to Saussure's theories and questioned their infallibility. The counterargument to Tokieda's premise was that his objections to Saussure's theories were based on Kobayashi's Japanese translation and that Tokieda had never, in fact, read the original text in French. Furthermore, he did not understand French well enough to interpret Saussure's thoughts. However, with the discovery of Saussure's rough drafts leading to his seminal work *Cours de linguistique générale* there is room to argue that Tokieda's interpretation of the translated text might be more accurate than his opponents claim.

In this paper, using Saussure's rough drafts, I focus on the similarities between Saussure's theories of— "*sujets parlants*" and Tokieda's notion of "*subjectivity*" and try to clarify the reason why Tokieda's linguistic theory bears a close resemblance to that of Saussure.

キーワード：Saussure, *Cours de linguistique générale*, 「語る主体 (sujets parlants)」, 時枝誠記, 「主体的立場」,

0. はじめに

現代言語学は、その形成と発展の多くを1916年に刊行された Saussure の代表的書である *Cours de linguistique Générale* (以下, CLG で表す) とそこで展開された学説に負っている。しかし Saussure の学説にはその主張内容において矛盾点や謎が数多く存在する。こうした問題について CLG から解答を求めることは容易ではない。その根本原因が CLG の記述の信憑性の問題である。CLG は1907年, 1908~1909年, 1910~1911年に, Saussure がジュネーヴ大学で三回にわたって行った一般言語学の講義を聴講した学生達の取ったノートを, Charles Bally (スイス1865-1947) と Albert Sechehaye (スイス1870-1946) が Albert Riedlinger (スイス1891-1913) の協力の元に再構成, 統合して編纂, 復元したものである。しかし Bally と Sechehaye は Saussure の講義に出席してはいない。こうして出来た CLG が Bally と Sechehaye による創作であり, Saussure の思想の断片が都合よく切り貼りされたパッチワークに過ぎず, それがつぎはぎだらけの CLG の記述の“ムラ”となって表れていることは, Saussure 研究者の間では一種の“暗黙の了解”であった。

また, こうした Saussure 学説の矛盾点に正面から異を唱えたのが我が国の国語学者, 時枝誠記である。時枝は『国語学原論』(1941)の中で「言語過程説」を主張し, 「言語過程説」を支える主要な考え方の一つに言語における「主体的立場」という捉え方をあげる。しかしながら, Saussure も CLG (1916)において, すでに「語る主体 (sujets parlants)」という考え方で, 同様の問題を論じている。

本稿では Saussure の「語る主体」と時枝の「主体的立場」について取り上げ, 1996年に発見された Saussure の自筆草稿と最新の Saussure 研究を踏まえて松中 (2018b)¹⁾で展開した考察をさらに進め, その相違について論考する。

*¹ 共通教育科
令和元年10月23日受理

1. Saussure の「語る主体 (sujets parlants)」

Saussure は「語る主体」について、CLGで「発話の回路」の説明とともに次のように述べている。

“Pour trouver dans l'ensemble du langage la sphère qui correspond à la langue, il faut se placer devant l'acte individuel qui permet de reconstituer le circuit de la parole. Cet acte suppose au moins deux individus ; c'est le minimum exigible pour que le circuit soit complet. Soient donc deux personnes, A et B, qui s'entretiennent:



“Le point de départ du circuit est dans le cerveau de l'une, par exemple A, où les faits de conscience, que nous appellerons concepts, se trouvent associés aux représentations des signes linguistiques ou images acoustiques servant à leur expression. Supposons qu'un concept donné déclenche dans le cerveau une image acoustique correspondante : c'est un phénomène entièrement *psychique*, suivi à son tour d'un procès *physiologique*: le cerveau transmet aux organes de la phonation une impulsion corrélative à l'image ; puis les ondes sonores se propagent de la bouche de A à l'oreille de B : procès purement *physique*. Ensuite, le circuit se prolonge en B dans un ordre inverse : de l'oreille au cerveau, transmission physiologique de l'image acoustique ; dans le cerveau, association psychique de cette image avec le concept correspondant. Si B parle à son tour, ce nouvel acte suivra — de son cerveau à celui de A — exactement la même marche que le premier et passera par les mêmes phases successives, (後略)”²⁾

“言語活動の総体のうちに、言語に相当する区域を見出すには、個人的行為をとって見る必要がある。これによって言の循環を組み立てることができる。この行為はすくなくともふたりの個人を予想する；それは循環が完全であるために要求しうる最小限度である。いま甲乙ふたりの人間が会話をするとせよ：



循環の起点は、一方の人・たとえば甲の脳のうちにある。そこで、われわれが概念とよぼうとおもう意識事実が、それらの表現に役立つ言語記号の表象すなわち聴覚像と結合する。いま、ある与えられた概念が、それに対応する聴覚像を脳のなかで放ったとする：これはまったく心的な現象であり、それにまた生理的過程がともなう：脳が発声器官にたいして、くだんの映像と相関的な刺激をおくるのだ；ついで音波が甲の口から乙の耳へと伝播する：純粹の物理的過程。つぎに、循環は、乙において、逆の順序をとって続行される：耳から脳へ、聴覚映像の生理的伝達；脳におけるこの映像とそれに対応する概念との心的連合。さてこんどは乙が話をするとなると、このあらたな行為は——かれの脳から甲の脳へと——最初のものと同寸分たがわぬ進行を追い、同一位相をつぎつぎと経るであろう、(後略)”³⁾

“Mais pour bien comprendre ce rôle, il faut sortir de l'acte individuel, qui n'est que l'embryon du langage, et

aborder le fait social.”⁴⁾

“しかしながらその役割をじゅうぶん理解するには、言語活動の胚種にすぎぬ個人的行為を脱して、社会的事実に着目せねばならない。”⁵⁾

言語記号に関する Saussure の議論は、一貫して「語る主体」という観点からなされている。しかし CLG における「発話の回路」の説明は、「語る主体」と銘打ちながら、決して語る側だけではなく、聞き手の回路が語る側と同じく重要な地位を占めている。こうした Saussure の「語る主体」について立川健二 (1986) は、

“言語学においては、いかなる実体的対象も与えられていないので、なんらかの視点によって二次的に対象を創り出すことしかできないというのである。”⁶⁾

“ソシユールの考えていた特権的な視点とは、〈語る主体の意識〉であり、かれは〈語る主体の意識〉に問うことによってはじめて、言語学者は言語の「現実」、すなわち科学的操作による抽象物でない真に具体的な対象＝単位を手にすることができると信じたのである。”⁷⁾

と述べる。これは CLG における、甲と乙の二人が会話をする際に同一相を経ることで互いの意思疎通が図られるという先の図に通じる説明であるが、ここでの主体とは、言語学における対象不在の問題に対する一つの架空の視点の提供に過ぎない。よってここで問題となるのは実際に話された parole ではなく langue である。そのことについて立川は、

“「語る主体」とはいつでも、それらは能動的にパロールを発するのではなく、ただ他人が発したパロールを受動的に受けとって、それを理解しようとする主体のことなのだ。ようするに、ソシユールのいう「語る主体」とは、いささかもことばを語る主体ではなく、ことばを聴く主体なのである。(中略)そして、主体にとって「聴く」(entendre)ということが、未分化のことばの背後にある〈意味〉を読みとり、それによって不連続な単位を切りだしていくことである以上、それは同時にことばを「了解する」(entendre)ことにほかならない。したがって、ソシユールのいう「語る主体」とは、「聴く」という行為が「了解する」という行為と共犯的であるかぎりにおいて、〈聴く主体〉(sujet entendant)なのである。”⁸⁾

と説明づける。同様の指摘は、末永朱胤 (2018: 38-39)⁹⁾においても見られる。末永は、

“ソシユールの言語(ラング)は、発話者ではなく、まさに聞き手のうちに見出される。そしてこの話し手と聞き手の非対称性こそ、ソシユール言語(ラング)概念の核心ではないだろうか。というのも、同時に話し手であり聞き手であることのできる者は誰もいない。この話し手と聞き手の非対称な関係性はバンヴェニスト的とも言える”

“話し手「わたし」と聞き手「あなた」の関係はどこまでも非対称だ。非対称的な交換関係であり、絶対的な非対称である。そこに言語主体の主体性の問題がある。ソシユールの言語(ラング)は聞く主体の側にあり、したがって聞き手の主体性と切り離せないのである。”¹⁰⁾

とその性質を説明する。

この二人の説明に基づけば、Saussure の言う「語る主体」とは、langue を基にした話し手と聞き手の双方の言語活動に他ならない。

2. 時枝誠記の「主体的立場」

一方、時枝が言語過程説を唱えるとき、そこに欠かすことのできない必然的視点は「主体的立場」という観点である。Saussure も時枝も共に「主体」という観点を取り上げるが、両者の違いは何であろうか。時枝によれば、「詞」と「辞」を区別するのも主体の関与の有無である。言語表現の成立には“主体(話し手)”, “場面(話し手の相手である聴き手)”, “素材(表現される事物または観念)”の三つの存在が必須条件である。時枝は主体という考え方を、次のように説明

する。

“こゝに言語研究の主体と云ったのは、必ずしも甲とか乙とかの特定個人を意味するばかりでなく、特定個人の言語を通して主体一般を考えることを意味するのである。故に日本語を考える場合には、日本語の主体一般を考えるということとなるのである。”¹¹⁾

そして「主体」の性質を、更に具体的に次のように定義する。

“言語過程観は、(中略)言語を、概念と音声との結合体としてではなくして、表現素材である事物或は観念を、概念化し更にこれを音声によって表白する主体的表現行為の一形式と観ずるのである。(中略)西洋語には西洋語に於ける伝統があり、国語には国語特有の把握の仕方がある。それらは言語主体の立場によって規定されるものであるから、これを原本的に溯れば、国語の特質は国語の話手である日本民族の民族精神に由来するものであるということが出来る。”¹²⁾

“ここに言語研究の主体と云ったのは、必ずしも甲とか乙とかの特定個人を意味するばかりでなく、特定個人の言語を通して主体一般を考えることを意味するのである。故に日本語を考える場合には、日本語の主体一般を考えるということとなるのである。”¹³⁾

時枝にとって、主体とは言語の話者一般だけでなく、日本語を話す場合は日本人全体という民族意識を強く訴える。ここから主体とは場面に対する考慮を行う社会的存在という認識が生まれ、これが国民の言語、国家の言語という形となる。しかしこれこそが「言語過程説」における一つの陥穽である。安田敏朗(2006:108)¹⁴⁾も指摘するように、日本語の場合の主体を日本人全体として捉えることは、時枝が当時置かれていた環境とも相まって、後々朝鮮民族の国語政策などから外国人の日本語習得という点で言語の問題から外れていくことになる。

そして「言語過程説」のもう一つの問題点は、過程を成立させる三要素の一つに「場面(聞き手)」を設けたことである。しかしこれがSaussureの言語相とどう異なるのか。松澤和宏(2013:567)¹⁵⁾は、

“ソシユールは、話す主体の意識における物理的な音と精神的な意味＝「記号」との結合を、記号間の相互的否定的な差異よりもいっそう根源的なものと見なしていたように思われる。”

と指摘しているが、そうすればSaussureと時枝との言語観のどこに違いがあるのか、ますます疑問になってくる。

3. Saussure の自筆草稿

1996年に発見されたSaussureの自筆草稿を紐解くと、そこにはCLGとは正反対とも言えるような主張が溢れている。時枝が批判的にしたlangueが実体であるというCLGにおける有名な主張も、Saussureの自筆草稿では以下のように正反対である。

“Dans des domaines comme celui de la langue, on ne peut pas dire que les différents êtres s'offrent du coup aux regards : il faut choisir un mot. Entité est pour nous aussi : l'être qui se présente.”¹⁶⁾

“言語ラングのような学問の領域では、様々な存在エートルが、それ自体として姿を現すとは言えません。正確に言い換えなくてはなりません。実体アンティテとは、私たちにとって、結局、現れ出て来る存在エートルなのです。”¹⁷⁾

“Dans la langue prise face à face, sans intermediaries, il n'ya ni unités ni entités données.”¹⁸⁾

“媒介なしに直面する言語ラングの中には、単位ユニテも所与アンティテの実体もありません。言語ラングの中に含まれる様々な実体アンティテを形成するものを捉えるために、また、他の秩序の実体を言語なるものラングイステイックの実体として見なすのを避けるためにも、努力が必要でです。”¹⁹⁾

“(la langue n'existe pas comme entité, mais seulement les sujets parlants!)”²⁰⁾

“^{ラング アンティテ}言語は実体として存在しているのではなくて、話す主体の裡にだけ存在しているのです!”²¹⁾

“Tout ce qui est amené sur les lèvres par les besoins du discours et par une operation particulière : c'est la parole.

Tout ce qui est contenu dans le cerveau de l'individu, le dépôt des forms entendues et pratiquées et de leur sens, c'est la langue. (中略)

De ces deux sphères, la sphère parole est la plus sociale, l'autre est la plus complètement individuelle. La langue est le reservoir individuel ; tout ce qui entre dans la langue, c'est-à-dire dans la tête, est individual.”²²⁾

^{ディスカール}“言述の必要に迫られ、特殊な働きで唇にもたらされたものの全体、それが^{パロール}言葉です。個 ^{アンディヴィジュ}人の脳の中に含まれている一切のものであり、^{フォルム}〈聞き取られ〉実践された形態、及びそれらの意味の収蔵庫、〈それが〉^{ラング}言語なのです。(中略)

この二つの領域のうち、^{パロール}言葉の領域とは優れて社会的なものであり、もう一つのもの〔訳注：言語〕はまったく完全に個人的なものです。^{ラング}言語とは個人的な貯蔵庫です。^{ラング}言語の中に、つまり頭の中に入っているすべてのものは、個人的なもの(中略)なのです。”²³⁾

そして記号と音の結びつきについても、Saussure の自筆草稿では次のように述べられている。

“Une succession de sons vocaux, par exemple mer ($m + e + r$), est peut-être une entité reentrant dans le domaine de l'acoustique, ou de la physiologie; elle n'est à aucun titre, dans cet état, une entité linguistique.

Une langue existe si à $m + e + r$ s'attache une idée.”²⁴⁾

“ある〈音声の〉音の継起、たとえば mer ($m + e + r$) は聴覚的なものの領域かあるいは生理学の領域〈に帰属する〉^{アンティテ}本体である〈かもしれない〉。それは、〈この状態では、いかなる資格であれ、〉言語学的^{アンティテ}本体にはなりえない。

ある一つの^{ラング}言語が存在するのは、 $m + e + r$ に観念が結びついている場合である。”²⁵⁾

“Le dualism profound qui partage le langage ne reside pas dans le dualism du son et de l' idée, du phénomène vocal et du phénomène mental ; c'est là la façon facile et pernicieuse de la concevoir. Ce dualism reside dans la dualisté du phénomène vocal COMME TEL, et du phénomène vocal COMME SIGNE – dufait physique (objectif) et du fait physic-mental (subjectif), nullement du fait «physique» du son par opposition au fait «mental» de la signification. Il y a un premier domaine, intérieur, psychique, où existe le signe autant que la signification, l'un indissolublement lié à l'autre ; il y en a un second, extérieur, où n'existe plus que le «signe», mais à cet instant le signe réduit à une succession d'ondes sonores ne mérite pour nous que le nom de figure vocale.”²⁶⁾

“言語を分割する根本的な二元論は、音と観念、つまり音声現象と精神現象の二元論にはない。それは〈二元論を〉考えるうえでは安易で有害な考え方である。この二元論は、かかるものとしての音声現象と記号としての音声現象の二重性にあり、物理的〈(客観的な)〉事実と物理的—〈精神的(主観的)〉事実の二重性にある。〈意義の「精神的」事実に対立する音の「物理的」事実なのでは〈まったくない〉。第一の領域があるが、これは〈内面的で〉心的であり、そこでは記号が意義と同様に存在していて、一方は他方に分かち難く結びついている。二番目の領域であるが、それは外面的で、そこではもはや「記号」しか存在しない。だがしかし記号はこの場合一連の〈音波に還元されてしまっているので、〉われわれにとっては、たかだか音声形象〈の名称にしか値しない。〉”²⁷⁾

“1) le caractère arbitraire du signe <(il n'y a pas de rapport entre le signe et la chose à designer);>.”²⁸⁾

“1) ^{シニョ}記号の恣意的な特徴。〈^{シニョ}記号と示されるものとの間には関連がありません〉”²⁹⁾

時枝が批判の矢面とした langue とその実体という部分とあわせて、Saussure と時枝の主張には相違がないことになるが、この点については松中 (2018b)³⁰⁾において詳細に検証しているので、そちらを参照されたい。

4. Saussure と時枝誠記の学問的類似

言語学の研究対象として、langue の優位性を説く部分が Saussure 自身の手によるものではなく、全て編者である Sechehaye と Bally によるものであることが明らかである現在、果たして時枝と Saussure の言語研究の姿勢に決定的な違いがあるのかさえ疑わしくなってくる。こうした現実を目にする時、Saussure の研究姿勢と時枝の研究姿勢は同一のものであると考える方が妥当である。

また主体意識における音と概念の結び付きについても、

“Dans l’association du signe à l’idée il n’y a rien qui lie en soi ce signe à cette idée. C’est une des raisons qui font qu’on doit éviter le terme de symbole, qui en soi est justement le contraire (後略).”³¹⁾

“観念と記号の結合の中で、その記号をその観念に結び付けるものが、それ自体には何もありません。象徴という用語 *terme* を避けねばならない理由の一つであって、まさに正反対のものなのです。”³²⁾

と、その結び付きの不可分性を否定し、CLG における記述とは正反対、すなわち時枝と同じ主張をしていると考えられるのである。時枝は、言語の存在条件として「主体」、「場面（聴き手）」、「素材（社会）」の三要素を挙げる。⁴⁴⁾「場面」は空間的な意味での場所と、それを満たす内容およびそれらを志向する主体の主観的意識をも含むものである。聴手とはあくまでも場面の一部としての聴手であり、時枝が言語において社会概念としてみるものが主体の表現行為に対する場面の影響であると言える。素材とは言語の表わす「表象、概念、事物」であって、時枝によれば「構成主義的言語観」における「意義或は意味の名に於いて、音声形式に対応するもの」であり、これらの要素はそれぞれ言語の外にあるものとされる。

末永朱胤 (2018: 34)³³⁾は、この問題に対して図の矢印の有無から、図に添えられた上向きと下向きの二本の矢印が CLG の編者による創作であることを明かしつつ、その向きの意味するところについて、

“矢印の向きは、話し手が聞き手かという、言語活動における主体のあり方に対応しているのである。下向きは話し手を、上向きは聞き手を表している。学生たちのノートの中に記された記号を表す図には、CLG においてと異なり、たいいていの場合矢印が添えられていないという事実、そして、たまたま矢印を伴うときは、二本ではなく一本の矢であり、またそれは上向きであるという事実は、記号概念における、したがって言語（ラング）概念におけるソシユールのある立場決定を示唆していないだろうか。すなわち、ソシユールの言語（ラング）概念は、話し手の側にはなく、聞き手の側に見出されるということの示唆である。”

と、同じく langue が聴き手側にも存在し、「語る主体」が話者のみに存在するのではないことを説明づける。

5. むすび

時枝による Saussure 学説批判は、小林英夫による CLG の邦訳である『言語学言論』を基になされた部分が少なからず存在するのは否定できない事実である。またその CLG 自体も、直接 Saussure 本人の手による書ではなく、教え子たちが彼の講義を間接的に張り合わせたパッチワーク的作業によるものであることは本稿のはじめに述べたとおりである。ここに、Saussure 自身の主張と CLG における主張に隔たりや違和感を生じせしめ、歪曲や誤解が生まれてもそれは至極当然のことである。このことは丸山圭三郎ら Saussure 研究家によって早くから指摘され、Godel による CLG の原資料や、Saussure の第二回と第三回の一般言語学講義に出席していた Constantin の残した講義ノートなどの資料を基に、CLG における主張や学説の内容が丸山の1970年代から80年代にかけての一連の著書において幾度となく修正されてきた経緯からも推し知ることができる。とりもなおさずそうした事実は、何よりも丸山圭三郎ら Saussure 研究家の間でも認められ、それに対する学説の修正や解説が繰り返され試みられてきたことは、これまでの研究の歴史が雄弁に物語っている。

CLG の訳者である小林英夫は、後年、時枝との邂逅を次の様に語っている。

“かれの有名な言語過程説の解説や批判を今ここでおこなうつもりはない。ただここで明らかにしておきたいことは、その出産の秘密である。結果においてたとえ消極的であろうとも、右の意味で、かれもまたソシュールの影響下にあることは認めざるをえないところである。(中略) ちなみに言語の成立をもっぱら個人心理学的に考えたところにも、時枝説は少壮文法学派の理論的代表者ヘルマン・パウエルに復帰した観がある。”³⁴⁾

小林のこの言葉は、時枝と Saussure の研究姿勢が共に同じ土壌にあったことを如実に物語っている。時枝誠記と小林英夫の邂逅については、松中 (2018a)³⁵⁾で詳述しているので、そちらを参照されたい。

こうした Saussure 学説とその翻訳によってもたらされる齟齬については、末永朱胤 (2018: 30)³⁶⁾も次のようにその問題の性質を訴える。

“一方時枝は、概念と聴覚像という二面の相互的な連結と呼応からなるソシュールの記号を一つの過程として捉えている。実体と過程は相いれない。時枝にとって、この記号概念は矛盾でしかないのである。だが、このソシュールの「矛盾」(と時枝には見えるもの)は、複数の誤解、複数の齟齬の複合によってもたらされた一掃結にほかならない。第一の齟齬は CLG と時枝の間にある。第二は CLG と小林の翻訳との間のそれだ。これが原書 (CLG) と読者 (時枝) の間に介入している。さらに、我々の知らぬ間に介入している第三の齟齬があるのではないか。周知のように、CLG とは、ソシュールの講義を受講した学生たちのノートを基に執筆・編集された死後出版なのだからだ。すなわち、第三の齟齬とは CLG のソシュールと「原資料のソシュール」の間の齟齬である。”

こうした時枝学説と Saussure 学説の主体的観点に対して、高木敬生は以下のように、両者に違いがないことを指摘する。

“時枝の言語過程はソシュールの発話の回路とほぼ同様の形式をとっていると言ってよいだろう。ただし、ソシュールは話手と聴手の二人を置きその間で記号がやり取りされるのに対し、時枝は、言語の存在条件として「主体」、「場面」、「素材」の三要素を挙げ、「言語は、誰 (主体) かが、誰 (場面) かに、何物 (素材) かにして語ることによって成立するものである」(『国語学原論上』, p. 57) とした。

「主体」とはまさに「語る処の主体」でありソシュールでいえば話者を指す。”³⁷⁾

結局、時枝が自身の学説である「言語過程説」で Saussure の学説を批判した結果見えてきたものは、自身の論が Saussure 学説を下敷きにし、その不備を補うことにより、自身の説を強固かつ有効なものにしようとしたという点である。この点については松澤和宏 (2011: 117) の以下の指摘が、衝撃的ではあるが、事実を如実に言い表しているであろう。

“おそらく時枝は、一方では通説に従ってソシュールをラングの言語学の提唱者と見なし批判しながら、他方では主体的言語意識を重視した側面を、自説を形成あるいは補強するために、積極的に摂取していったのではないかと思われる。”³⁸⁾

また時枝の Saussure 学説批判の本質については、松澤 (2010: 25) の以下の指摘が的を射ている。

“時枝がソシュール批判を文献学の観点から検討することを通して、言語過程説において概念と聴覚映像を結びつける箇所に本来働いている筈のラングの不在が浮き彫りになると同時に、『講義』が遮蔽した言語の二重性が、まさに否定的に浮かび上がってくるのである。”³⁹⁾

Saussure 自身も言語が動的なものであることは認めた上で、それを科学的研究対象とするための静的な基準をどこに求めるべきかという一つの答えが langue であった。しかし時枝は、言語学において、langue という仮説の上に立つことで成立する概念を否定し、具体的経験から導かれた言語過程説という自説の有効性を声高に主張したのである。時

枝のこうした批判の姿勢は、釘貫亨（2006：125-126）⁴⁰⁾によれば、フッサールの哲学に深く傾倒していたことに由来すると考えられるが、それを認めた上でも、Saussure 学説における langue の正当性や、時枝の言語過程説における「過程」概念の正当性までも否定し得る正当な理由にはならない。松中（2018b）⁴¹⁾で示したように、Saussure の学説における「現象」概念と時枝の「過程」概念が、同一の対象を指している可能性は極めて高い。事実、言語とは une entité psychique（小林英夫訳「心的実存体」）ではなく、話者と聴者の間に成り立つ「行為」とその「過程」によって決定され得るものであるとする時枝学説の出発点が、自筆草稿によって示された Saussure の言語研究の出発点と酷似していることは、疑いようのない事実である。

そしてこのことは、Saussure と時枝の双方に今日的な認知的観点での人間主体の言語研究の源流が見出せる理由に他ならないのである。

註

- 1) 松中完二. (2018b). 『ソーシャル言語学の意味論的再検討』 pp. 159-175. ひつじ書房.
- 2) Saussure, F.de. (1916). *Cours de Linguistique Générale*. pp.27-28. Paris: Payot.
- 3) 小林英夫訳. (1972). 『一般言語学講義』 pp. 23-24. 岩波書店.
- 4) Saussure, F.de. (1916). *Cours de Linguistique Générale*. p.29. Paris: Payot.
- 5) 小林英夫訳. (1972年). 『一般言語学講義』 p. 25. 岩波書店.
- 6) 立川健二. (1986). 『《力》の思想家ソシュール』 p. 52. 書肆風の薔薇.
- 7) 立川健二. (1986). 『《力》の思想家ソシュール』 p. 57. 書肆風の薔薇.
- 8) 立川健二. (1986). 『《力》の思想家ソシュール』 p. 80. 書肆風の薔薇.
- 9) 末永朱胤. (2018). 「時枝論争とソシュールの言語概念—言語における実体と主体」『成城文藝第246号』 p. 38. 成城大学文学部.
- 10) 末永朱胤. (2018). 「時枝論争とソシュールの^{ラング}言語概念—言語における実体と主体」『成城文藝第246号』 p. 39. 成城大学文学部.
- 11) 時枝誠記. (1940). 『国語学史』 p. 8. 岩波書店.
- 12) 時枝誠記. (1941). 『国語学原論』 pp. 66-67. 岩波書店.
- 13) 時枝誠記. (1941). 『国語学原論』 p. 28. 岩波書店.
- 14) 安田敏朗. (2006). 『「国語」の近代史：帝国日本と国語学者たち統合原理としての国語』 p. 108. 三元社.
- 15) 松澤和宏. 校註・訳. (2013). 『フェルディナン・ド・ソシュール「一般言語学」著作集 I 自筆草稿『言語の科学』』 p. 567. 岩波書店.
- 16) Eisuke, K. (1993). *F.de Saussure Troisième cours de Linguistique Générale (1910-1911) d'après les cahiers d'Emile Constantin*. p.290. Paris: Pergamon Press.
- 17) 相原奈津江・秋津伶訳. (2003). 『フェルディナン・ド・ソシュール一般言語学第三回講義（1910-1911）エミール・コンスタンタンによる講義記録』 p. 159. エディット・パルク.
- 18) Eisuke, K. (1993). *F.de Saussure Troisième cours de Linguistique Générale (1910-1911) d'après les cahiers d'Emile Constantin*. p.290. Paris: Pergamon Press.
- 19) 相原奈津江・秋津伶訳. (2003). 『フェルディナン・ド・ソシュール一般言語学第三回講義（1910-1911）エミール・コンスタンタンによる講義記録』 pp. 159-160. エディット・パルク.
- 20) Eisuke, K. (1997). *F.de Saussure Deuxième Cours de Linguistique Générale. (1908-1909) d'après les cahiers d'Albert Riedlinger et Charles Patois*. p.93. Paris: Pergamon Press.
- 21) 相原奈津江・秋津伶訳. (2006). 『フェルディナン・ド・ソシュール一般言語学第二回講義（1908-1909）』 p. 168. エディット・パルク.
- 22) Eisuke, K. (1993). *F.de Saussure Cours de Linguistique Générale. Premier et troisième cours d'après les notes de Riedlinger et Constantin*. Collection Recherches Université Gakushuin n° 24. p.92. Tokyo: Gakushuin University.
- 23) 相原奈津江・秋津伶訳. (2008). 『フェルディナン・ド・ソシュール一般言語学第一回講義リードランジェによる講義記録』 pp. 150-151. エディット・パルク.
- 24) Bouquet, S. & Engler, R. (2002). *Ferdinand de Saussure, Écrits de linguistique générale*. p.20. Paris: Gallimard.
- 25) 松澤和宏. 校註・訳. (2013). 『フェルディナン・ド・ソシュール「一般言語学」著作集 I 自筆草稿『言語の科学』』 p. 9. 岩波書店.
- 26) Bouquet, S. & Engler, R. (2002). *Ferdinand de Saussure, Écrits de linguistique générale*. pp.20-21. Paris: Gallimard.
- 27) 松澤和宏. 校註・訳. (2013). 『フェルディナン・ド・ソシュール「一般言語学」著作集 I 自筆草稿『言語の科学』』 pp. 11-12. 岩波書店.
- 28) Eisuke, K. (1997). *F.de Saussure Deuxième Cours de Linguistique Générale. (1908-1909) d'après les cahiers d'Albert Riedlinger*

- et Charles Patois. p.7. Paris: Pergamon Press.
- 29) 相原奈津江・秋津伶訳. (2006). 『フェルディナン・ド・ソシュール一般言語学第二回講義 (1908-1909)』 p. 24. エディット・バルク.
- 30) 松中完二. (2018b). 『ソシュール言語学の意味論的再検討』 ひつじ書房.
- 31) Eisuke, K. (1997). *F. de Saussure Deuxieme Cours de Linguistique Generale. (1908-1909) d'après les cahiers d'Albert Riedlinger et Charles Patois*. p.8. Paris: Pergamon Press.
- 32) 相原奈津江・秋津伶訳. (2006). 『フェルディナン・ド・ソシュール一般言語学第二回講義 (1908-1909)』 p. 25. エディット・バルク.
- 33) 末永朱胤. (2018). 「時枝論争とソシュールの言語概念—言語における実体と主体」『成城文藝』 246, p. 34. 成城大学大学院文学研究科.
- 34) 小林英夫. (1978). 「日本におけるソシュールの影響」『月刊言語』 1978年 3月号, pp. 48-49. 大修館書店.
- 35) 松中完二. (2018a). 「ソシュール言語学と翻訳—小林英夫と時枝誠記の邂逅—」国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』 第44号, pp. 37-58. 国際基督教大学.
- 36) 末永朱胤. (2018). 「時枝論争とソシュールの言語概念—言語における実体と主体」『成城文藝』 246, p. 30. 成城大学大学院文学研究科.
- 37) 高木敬生. (2014). 「言語の社会性について—ソシュールと時枝から—」『エウローペー』 No. 21, p. 69. 成城大学大学院文学研究科.
- 38) 松澤和宏. (2011). 「時枝誠記の〈主体的立場〉とソシュールの〈話者の意識〉—言語の科学と解釈学」釘貫亨・宮地朝子編『ことばに向かう日本の学知』 p. 117. ひつじ書房.
- 39) 松澤和宏. (2010). 「ソシュールの翻訳と解釈—時枝誠記による『一般言語学講義』批判をめぐる予備的考察」グローバル COE プログラム『テキスト布置の解釈学的研究と教育』 p. 25. 第 8 回国際研究集会「日本語テキストの歴史的軌跡解釈・再コンテクスト化・布置」
- 40) 釘貫亨. (2006). 「ソシュール『一般言語学講義』と日本語学」松澤和宏編. (2007). 『SAUSSURE et LA SCIENCE DES TEXTES ソシュールとテキストの科学』 pp. 125-126. 名古屋大学大学院文学研究科.
- 41) 松中完二. (2018b). 『ソシュール言語学の意味論的再検討』 ひつじ書房.